

---

# 恋姫無双 声を聞く者

月天輝夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双 声を聞く者

### 【Nコード】

N2882N

### 【作者名】

月天輝夜

### 【あらすじ】

この小説の

30%は作者の妄想で

10%は作者の趣味で

7%はダークマターで

3%はカツ丼で

50%は優しさで

出ています。

また、作者は『史記』どころか、『三國志演義』も読んだことのない不届き者です。

ですので、史実から、及び外史からも大きく、左慈たちがいなくても外史が崩壊してしまうかもしれない程かけ離れてしまうかもしれません。生暖かく、紫苑や桔梗の霊峰の間くらい暖かく見守ってください。

オリキャラも出ますよー

## 小説を読む前に

この小説の

30%は作者の妄想で

10%は作者の趣味で

7%はダークマターで

3%はカツ丼で

50%は優しさで

出来ています。

また、作者は『史記』どころか、『三國志演義』も読んだことのない不届き者です。

ですので、史実から、及び外史からも大きく、左慈たちがいなくても外史が崩壊してしまうかもしれない程かけ離れてしまうかもしれませんが、生暖かく、紫苑や桔梗の霊峰の間くらい暖かく見守ってください。

オリキャラも出ますよー

## 序章

### 序章

「のう……手合わせしないか？」

学校から帰ってくると、清涼院せいりょういん 輝螺あきりは木刀を持った祖父にそう言われた。

「いいけど……また突然だね」

輝螺は驚きつつも木刀を受け取った。

というのも、一線を退いた輝螺の祖父 - 玄刀から、修行以外で勝負しようとは言われた事は久しぶりなのだ。

何の一線かと言えば……

暗殺。

現代日本において、刀での暗殺など、時代錯誤もいい所である。だが、それが実在し、依頼されていたのだから世も末である。

清涼院家は戦国時代以来、暗殺を主としてきた家である。

群雄割拠の戦国時代。

幕政期・幕末・明治、そして戦時中。

その時折々必要とされれば依頼を受ける、忍集団違い、主を持たぬ暗殺集団。それが清涼院家であった。

今も蔵を覗けば、様々な家紋が刻まれた名品を目にする事が出来る。とは言っても現代ともなれば依頼などなく。

現に輝螺の父親はバリバリの企業家で、今や大企業の社長である。

そんな清涼院家でも、古来より磨いてきた暗殺術、つまり剣術を絶やすつもりはなく……というか勿体ないので。

最後の暗殺者、清涼院 玄刀は孫の輝螺に剣術を叩き込んでいた。

幼少から剣術を教え込まれていたためか、輝螺は中学に入ってから剣道部に入部。初めこそ剣術と剣道との違いに戸惑ったが、生まれつき持っていた剣の、というより武術の才を持っていた輝螺は瞬く間に成長。

そして初出場の全中を制覇。そして怒涛の三連覇。

その圧倒的な強さから、数多の高校から声がかかるが、全て拒否。

普通受験で地元の公立高校に入った。

だがその実力を知る者達は、インターハイ三連覇も期待されたが、二年間はどんな小さな大会にも出場せず、皆首を傾げていた。

まあ、三年になってから再び出場し始め、インターハイ、そして国体でも優勝を勝ち取った。

そんな輝螺も受験で引退。自主練こそすれど、受験勉強の毎日であった。

「まあいいじゃろ。たまには手合わせくらいせんと、腕が鈍るぞい」  
カツカツカと笑いながら道場に向かう玄刀を見て、輝螺は苦笑しつつもそれに着いていった。

道場に着いた二人は、準備運動もそこそこに木刀を構えた。

しかも防具をつけないで。

とは言っても、二人がこうして修行するときには防具はつけたことはない。

何故なら清涼院家の剣術はあくまで殺人用、つまりは実践ようだから。

らだ。

ピリピリした空気が流れる中、先に動いたのは輝螺。

強い踏み込みで目にも留まらぬ速さで、一瞬の内に刃を突き出す。

しかし玄刀はそれを紙一重で避け、がら空きの背中を狙う。

もう殺す気なのではないかとも思える一撃だったが、輝螺は人体力学上無理者ね？　と言いたくなるような急角度で方向を変えるとそのまま脇を狙う。

そんな見ている方がハラハラしてしまうような戦いを続けること三十分。

「はっ！！」

決定的な一瞬を突いて、輝螺は玄刀の喉元に刀を突きつけた。

互いの呼吸しか聞こえない、静まり返る道場。それは玄刀の笑い声で破られた。

「ワツハツハ！強くなったのう輝螺！！まさか負けるとは思わなかったぞー！！」

「よく言うよ。そんだけブランクあるのにそんなの反則だって」

刀を下ろしながらボヤク輝螺に、玄刀はまたも楽しそうに笑う。

何がそんなに面白いのか、と輝螺も苦笑したが、自分のと玄刀の木刀を拾うと道場を出ようとした。

「結構遅くなったから先に行くよ。今日、父さん帰ってくるし」

「おう。夕飯は豪華にの」

はいはいと生返事を返して出ようとした輝螺だったが、ふと立ち止まった。

「ん？どした？」

「いや、どうしていきなり勝負しようだなんて言ったんだ？」

輝螺の何気ない一言に、玄刀はほんの刹那言いよどんだが、すぐに答えた。

「単に今の实力を知りたかっただけじゃよ。しばらく勉強ばかりだったみたいだったからのう」

その答えに納得したのか、輝螺は今度こそ道場を出た。

一人残された玄刀は、輝螺が出て行ってからしばらくして呟いた。

「……………流石は巫の血かのう」

その呟きはどこか悲しげで。

「父さん遅いな」

「なあに、また遅れてるのである」

輝螺が料理を作り終えても、輝螺の父・刀也は帰って来なかった。

「それより、こんな酒じゃなくて、もっとよい酒は無いのか？」

「ない……って何飲んでんの！！」

視線を玄刀に戻すと、いつの間にか酒を飲んでいた。

「こんな安酒じゃつまらんわい。蔵にスゴいあるから、それ取ってきなされ」

つたく、と頭を掻きながらも、輝螺は蔵へと向かった。

輝螺が出て行った後、玄刀が一人で酒を飲んでいると、ギシリと音がする。

「お、刀也か」

そこにいたのは輝螺の父・清涼院 刀也だった。

「はい。輝螺はもう行ったようですね」

「ぶつぶつ言いながらじゃたがな。なに、あやつなら心配いらんよ。」

外史であることやっていけるさ」

「そう、ですね。アイツは資格もあるようですし」

刀也が肩の力を抜くと、部屋の空気も和らいだ。

「そう言えば、輝螺が行く外史はどのような世界なんです」

「そうじゃのう……〜ドキッ 乙女だらけの三国志演義、って所  
かのう」

「は？」

『なーなー、お菓子ちよーだいなー』

『あれーどこいくん？』

「っーか、少しは静かにしろー!!」

輝螺は周りに群がる小鳥たちを鬱陶しそうに手で払った。それでも小鳥たちは諦めずに輝螺の肩に停まり、ピーピー鳴く。

『おーかーしーちよーだーいー』  
『どーこーいーくーんー？』

「まじでうっさいわ！！蔵から戻ったらやるからちっと黙っとけ！！」

小鳥に向かって怒鳴る輝螺。端から見たら怪しさ百パーセントだが、これには理由がある。

輝螺は動物の声が聞けるのである。

とは言っても、今のように所かまわず話しかけられるので、結構迷惑しているのだが。まあ助けられることも多いので、邪険に出来なくもあつた。

そんなこんなしているうちに、蔵に着いた。

「さて、酒酒つと……って、蔵の中にある酒って大丈夫なのか……ん？」

そこはかとな不安に駆られながらも、酒を探していると、物陰から物音がした。

「なんだ？まさかネズミじゃないだろ……刀？」

ネズミかなんかかとそちらの方をゴソゴソすると、一振りの刀が目に入った。

何故か気になった輝螺は、その刀を手を取った。

「まさか……抜けるとか？」

冗談半分で刀の柄に手をかけると、新品の刀のようにスッと抜けた。

「おおう、マジで……」

『全く……やっと来おったか』

「……気のせいだ」

突然頭の中に女性の声が鳴り響き、輝螺は無視することにした。

『おい！！無視するでない！！聞いておるのか！！』

さつきよりも大きな声がしたが、輝螺はそれでも無視し続けた。

『（ブチ）ほう……そうか、そうくるのなら容赦はせん。一応行くか否か聞こうと思ったが知らぬ。強制じゃ、輝螺よ』

「は？って何事ー！！」

どこか切れ気味な声が出たかと思うと、突然刀が光りだし、たちまち輝螺は光に包まれ気絶してしまった。

そんな意識の無いはずの輝螺の頭の中に声が響く。

『まあ呪いを解いてくれた礼じゃ。氣の才を授けよう。万能じゃからな、感謝するがよい』

## 第一章 巻

「……………ん…」

どれだけ気絶していたのか。

輝螺が目を覚ますとそこには

一面の青空が広がっていた。

「（……え、何事？つて、あらら？）」

何がなんだか分からず困惑していると、自分が喋れない事に気がつく。

そのことにさらに驚き、ふと自分の手を見ると

なんかスゴく小さくなっていた。

「（ええええええええ！？ちっちゃっ！！手ちっちゃ！！これじゃまるで赤んぼ）」

そこまで考えてはっとする。

さあ自分の姿を見てみよう。

ちっちやい手足。

ちっちやい身体。

ちっちやい等身。

「（俺ちっちやくなってるーっ!?!?）」

輝螺の心の叫びの通り、輝螺の身体はかなり縮んでいた。

「（いやいやいやいやちよっと待て。なに?何事?）」

あまりに突拍子のない出来事に輝螺は錯乱してしまった。

それでも何とか落ち着くと、まずは何とか声を出せるか試すことにした。

「（誰かいないかー！！）おぎやああー！！（ん？大声は泣き声になるのか！？ならー！！おーい！！おーい！！）おぎやああー！！おぎやああー！！」

輝螺は必死になって叫び、もとい泣き続けた。

すると

「む、ここかー！！」

馬にのった男が、輝螺の声を聞きつけてやってきた。

「（助かったーっ！！）おぎやああー！！おぎやああー！！」

「まさかとは思ったが本当に赤子がいるとはな……。何にせよ無事でよかった。もう大丈夫だからな」

その男は輝螺を優しく抱き上げると、再び馬に乗って走り出した。

「（よかったー……このまま拾われなかつたらどう……なつてた……か……）すー……すー……」

助けられた事で気が抜けた輝螺は、眠ってしまった。

次に目を覚ましたのは、やはり見知らぬ所だった。

「（ん……ここは？あ、あつたけ）」

「ん？お、起きなさったか。ちょうどよい。月蓮殿、仁殿も起きなさったぞ。お腹が空いたんでしような」

上から聞こえた声に、意識を覚醒させた輝螺の目に入ったのは、B I Gなボイン。

「（うおっ!?!）」

「え？輝螺も起きちゃった？ごめん祭。雪蓮、まだ足りないみたいだからもう少し抱っこしてあげて。というかアンタ、そんなにオツパイ大きいんだから、母乳くらいでないの？」

「出ませぬ。それより江東の虎と言われたあなたが何を仰るのですか」

どうやら輝螺は祭と言つ女性に抱っこされているようだ。

「（と言つか、江東の虎って三国志の孫堅の異名じゃなかったか？）」

「

……

「(って、こっつて三国志の世界!!!!???)?しかも孫堅女だし!!?)おぎやああ!!おぎやああ!!」

「わ!?月蓮殿!!江殿、泣き出してしまわれましたぞ!!……ええい!!月蓮殿、空いてる乳を出しなされ!!」

「わっ!?ちよつと祭。そんなに乱暴にしたら雪蓮がびっくりしちゃうぞ」

「おぎやああ!!おぎやああああ!!」

「あーもー、祭!!雪蓮まで泣いちゃったじゃないの!!ほーら雪蓮、怖い怖い祭おばちゃんは気にしちやだめよー」

「おばっ!?私はまだそんな年じゃ……!!」

それからも二人は輝螺と雪蓮の頭上で言い争っていたが、お腹がいつぱいになったからか、輝螺は再び眠くなってきた。頭脳は大人でも、やはり身体は赤子である。

「あら、輝螺も雪蓮も眠くなっちゃった?」

「ならばそろそろ布団に入れて差し上げましょう。私達は江殿と策殿の寝顔を眺めようじゃありませんか。きっと可愛らしいですよ」

そう言つと、輝螺と雪蓮は一緒に布団に寝かせられた。

「（策殿ってことは、この子は孫策か……やっぱり女の子ってことは、孫権も女の子なのかな……）」

輝螺は隣の雪蓮の事を考えていた。

「（そんなら俺がみんなを守ってやんないとな……拾ってくれた、そして、この人達にお礼をするために……）すー……すー……」

輝螺は心の中で一つの決心をして、眠りについた。

「ふふふ、やっぱり我が子は可愛いわ……あら？ふふふ、見て祭」

「ええ。お二人仲がよろしいようで」

月蓮と祭が見守る先には、手を握り合う輝螺と雪蓮の微笑ましい姿があつた。

時は流れて……

「皆、勝ち鬨をあげよー!!」

「「おおおーっ！！！！！」」

祭の叫びに答えるように兵士達が叫ぶ。

「これより帰還するー！！」

月蓮の号令により、兵士達は隊列を正した。

乱れぬ隊列は見事。

そんな隊列の先頭には、月蓮と祭、呉の大都督周異 - 真名を永琳という - 、そして……

「見事な指揮だったわよ、輝螺」

成長した輝螺の姿があった。

輝螺はあの後、孫家の長男になり、姓は孫、名は仁、字は江武、そして真名は輝螺となった。

初めてこそ、三国志の英傑の孫堅や黄蓋が、女性だった事に戸惑ったものの、実の子のように愛情を与えてくれた彼女に、今では感謝の念を抱いている。

「そんなことないさ。兵士の皆が頑張ってくれたからだよ」

「何を言う。輝螺殿の隊が一番功績をあげたのですぞ。ご謙遜なされるな」

「謙遜なんてしてないさ。第一、俺は指揮よりも先頭で突っ込む方が好きだしね」

「もう。輝螺君までそんなこと言って。月蓮みたいなこと言わないでよ」

「む。それはどういふことよ永琳」

「そのまんまの意味だけど？ねえ、祭？」

「そうじゃのう。これ以上月蓮殿が増えたら儂たちも大変じゃ」

「んなっ！？もう！！二人共もう知らない！！」

祭と永琳におちよくられ、月蓮はプイツと拗ねてしまった。

そんな子供のような大人三人を見て、輝螺は苦笑した。

「ほらほら、祭姉も永琳さんも、母さんをおちよくるのもそのへんにして。あとで仕返しされますよ」

輝螺の言葉を聞いて、二人もひとしきり満足したので、おちよくるのを止めた。

見事にこの場を治めた輝螺を見て、兵士達は、ああ、この人が一番大人だなあ……と思っていたとか。

「あーきーらーっ！！」

輝螺が建業の館に着くと、雪蓮が走ってきて輝螺に飛びついた。

「おっと。雪蓮、ただいま」

「えへへ、おかえり」

「雪蓮ー!!」

受けとめられた雪蓮はニパツと笑った。そして、雪蓮から遅れて、三人が走ってきた。

「もう、急に走らないで。蓮華様や小蓮様まで置いていって」

「だって冥琳。輝螺が見えたから……」

雪蓮は同い年の冥琳に叱られ、シュンとしてしまった。

その様子に、輝螺はさっきの月蓮と永琳のやり取りを思い出す。

「ほらほら、冥琳も許してあげて。雪蓮も悪気があったわけではないんだし」

「む……まあそれもそうね。それよりも、お帰りなさい、輝螺」

冥琳は雪蓮を叱るのを止めると、気を取り直して輝螺に顔を向けた。

「ああ。ただいま冥琳。それと、蓮華と小蓮も。俺がない間も、しっかりしてたか？」

「は、はいっ！！私、頑張りました」

蓮華は急に話を振られたので、しどろもどろになってしまっ。

「そっか。エライぞ蓮華」

「あ、ありがとうございます……」

輝螺は蓮華の頭を撫でた。蓮華も初めはびっくりしたが、すぐに顔を綻ばせた。

だがそれを面白くなさげに見る者が一人。

「むー、おねえちゃんばっかりずるい！　しゃおだっておべんきょうがんばったんだよ！」

ブクーッと可愛らしくほつぺたを膨らませているのは小蓮。そんな小蓮にも輝螺は優しく頭を撫でた。

「そっか。勉強嫌いなのによく頑張ったな。エライぞ小蓮」

「うん！　おにいちゃんだいすきー！」

不機嫌そうな顔もどこかに吹き飛び、満面の笑みを浮かべる小蓮。

頭を撫でられて嬉しそうにしている二人には、パタパタ振られる尻尾が見えた。

「そっか。輝螺。月蓮様や母様は？」

「もうすぐに来るよ。じゃあ俺は先に部屋に戻るよ」

「あ、輝螺！ 宴会もあるからすぐに来てよね！」

雪蓮に分かったと返事をする、輝螺は自分の部屋に戻った。

雪蓮たちと別れた輝螺はへやに戻った。

すると中にいた二羽の鳥が輝螺の前に降りた。

どちらの鳥も鷹のように凛々しい身体で、その長い尾も孔雀のように美しい。

そして一番目を惹くのは、彼らの身体を覆う真紅の羽根。

誰もが見惚れてしまうほど見事なその姿は、輝螺の、ひいては孫呉の象徴にもなりつつある。

完璧に見えるこの二羽に、欠点があるとすれば……

『おつかれさーん』

『なーなーおかしちょーだい』

口調が軽いといったところか。まあ輝螺にしか聞こえないので問題はないが。

「ありがとな鳳。あと鳳、着替えたら豆やるから待ってるな」

『どーいたしまして』

『はやくしてなー』

二羽はそう言つと、暇つぶしにと羽繕いを始めた。

実はこの二羽、輝螺が蔵に入る前に話しかけてきた小鳥たちである。どうやらあの時一緒についてきてしまったらしい。で、何の因果か、立派な姿になっていたのである。

さらに輝螺がまだ小さい頃から姿は全く変わらず、まるで鳳凰のようであった。

輝螺も気になったので本人達に聞いてみたところ、

『なんかねー、僕たち鳳凰になったみたい。僕は男だから鳳だね』

『ボクは女の子だから凰だね。フェニックスだから歳取らないのー』

フェニックス言うなと思つたが、そういうことらしい。

まあ輝螺にとっては、かなり面白い話し相手なので、気にはならなかった。

「んじゃ、俺は宴会にいつてくるわ」

『僕もいくー』

『ボクもー』

二羽はそう言うと、輝螺の肩に停まった。

一応力は調節しているので痛くはない。

廊下に出た輝螺は、肩にいる二羽を改めて見た。

「しっかしお前らデカいな」

『そりゃ鳳凰だしね』

『そりゃフェニックスだもん。そんなことより早く行こーよー』

凰は、翼をバタバタさせて催促した。

「分かった、分かったから、バタつかせるのはやめろって。もう着くからジツとしてろ」

『はい』

相変わらず呑気な二羽に輝螺は思わず溜め息をついてしまった。

宴会会場に着いてみると、もうすでにどんちゃん騒ぎとなっていた。

『輝螺輝螺、早く早くー』

『ボクお肉がいいー』

「はいはい。えーっと……あ、その君！」

騒ぐ二羽に呆れながらも、輝螺は近くにいた侍女に声をかけた。

「は、はい！何でしょうか孫仁様！」

「あ、いや、ちょっと頼もつとしたんだけど……忙しそうならいいよ？」

侍女の少女の慌てっぷりが半端ではなかったので、輝螺も遠慮しようにとしたのだが、それに気づいた少女はさらに慌てて首を振った。

「だ、大丈夫です！孫仁様のお願いでしたらなんでもやり遂げますから！」

「いや、そんなに肩張んなくても……まあいや。こいつらに肉、取ってきてくれないか？」

「はい！解りました！」

少女は頷くと、ものすごいスピードで走り去って行ってしまった。

「……まあ、母さんたちの方にいくか」

この場でジツとしていても意味がないので、輝螺は月蓮達のところに行くことにした。

「あ、遅いわよ輝螺。先に始めちゃったわよ」

「ごめん。鳳と凰見てたからさ」

「あら、輝螺君、鳳と凰も連れてきたのね」

月蓮の隣で、祭と一緒に飲んでいた永琳が輝螺に話しかけてきた。

「コイツ等も宴会出た

い、って聞かないんですよ。そう言えば雪蓮達は？」

「小蓮は寝ちゃったわ。雪蓮と蓮華と冥琳は給仕のお手伝いしてるわ」

見ると三人は兵のみんなに酒などを配っている。

輝螺がその様子を眺めていると、蓮華がこちらに気づき、酒を持って輝螺の元にやってきた。

「お兄様っ、お酒です」

「お、ありがとな蓮華」

輝螺は蓮華に酌してもらつと、空いてる方の手で蓮華の頭を撫でた。

「あ……お、お兄様……恥ずかしいです……」

蓮華はそう言うが、まんざら嫌そうには見えなかったので輝螺は頭を撫で続けた。

すると、先ほどの少女がたくさん肉を皿に持ってきてやってきた。

後ろには、少女と瓜二つの少女も肉で一杯の皿を持ってきている。

「し、失礼しますつ。輝螺様、お肉、持ってまいりました！」

「ましたっ！！」

「あ、ありがとな。ほら、二人共。お待ちかねの肉だ」

『わーいお肉ー』

『いただきまーす』

鳳と凰は輝螺の肩から飛び降りると、お皿一杯の肉を啄み始めた。

「流石は鳳と凰じゃな。食べ方が上品じゃ」

酒を飲みながら二羽の様子を見ていた祭がそんなことを言っていたが、

『お肉おいしー』

『デーリシヤース』

と、二羽の声が聞こえる輝螺にとつてしてみれば、上品とは言い難かった。

「あら？日華に月華。もう輝螺に挨拶したの？」

少女二人を見つけた月蓮は、二人に尋ねた。だが輝螺は何のことが解らなかった。

首を傾げている輝螺を見て察した月蓮はちょうどいいと、二人を輝螺の前に連れてきた。

「輝螺、ちょうどいいから紹介するわ。今日から貴方の専属侍女の、大喬ちゃんと小喬ちゃんよ」

月蓮が紹介すると、少女二人、大喬と小喬は緊張した面もちで輝螺に挨拶した。

「わ、私は大喬です！真名は日華です。一生懸命頑張りますのでよろしく願います！」

「私はお姉ちゃんの妹の小喬です！真名は月華です！よろしく願います孫仁様！」

大喬・日華は顔を真っ赤にさせて、小喬・月華は元気よく挨拶した。だが、輝螺は突然すぎてポカンとしてしまった。

「専属侍女？ どういうこと？」

「ほら、輝螺も色々な仕事をするようになったじゃない？私には永琳。雪蓮には冥琳みたいな補佐してくれる人がいるけど、輝螺にはいないでしょ？そういう人は自分で探してもらうけど、やっぱり大変だしね。身の回りの世話くらいは、って喬玄さんに相談したら、二人をつていってくれたのよ」

「補佐ねえ……」

そう言って輝螺は二人のことを見た。

すると二人は、輝螺が乗り気ではなさそうに見え断られると思い、思わず泣きそうになって顔を伏せてしまう。

だが次の瞬間、二人は頭を撫でられていた。

慌てて頭をあげると、そこには優しく笑いかけてくれる、新しい「主人様」。

「そんな泣きそうな顔をしなくてもいいよ。よろしくな大喬、小喬」

「は、はい！」

二人は目をゴシゴシこすると、満面の笑みを浮かべて微笑んだ。

喬姉妹との挨拶も終え、さてのんびり飲もうと思っていた輝螺だったが……

「あ〜き〜ら〜、にやに〜？もうのめにやいの〜？」

「しえ、雪蓮……くっつきすぎっ」

輝螺の左腕に抱きつきながら、真っ赤になっているのは雪蓮。

母親譲りの大きな山を押し付けているのは、確実にわざと。

「うーん……あきら、いいにおい……」

「冥琳、キミ、わざとかい？」

輝螺の後ろから抱きついているのは冥琳。

こちらも母親譲りの霊峰を輝螺の頭に押しつけているのは偶然ではないだろう。流石は未来の大都督。

輝螺も男。嬉しくないと言えば嘘になるが、今は宴会。目立つことこの上ない。現に、隣の保護者三人組は大笑いしている。

なのに輝螺が振り払えないのは、したらしたでさらに騒ぐであろう雪蓮がいるから、というのもあるが、なによりもその原因なのは……

「おにいしゃまゝまだまだこりえかりやでしゅよ」（こぼこぼ）」

真っ赤になって、酒を注いでくる蓮華であった。

何故こうなったかというと、日華と月華との顔合わせの後、輝螺が仲良くなるためといって、日華と月華を席に誘った。

そこで、蓮華が拗ねてしまったのだが、輝螺が蓮華のことも誘ってくれたので、機嫌を直してくれた。

因みに、この時が蓮華が酒席に着いたのが初めてで、輝螺はすっかり忘れていた。

『孫権は酒乱』という事実だ。

もうそこからは、あっという間だった。

数杯飲み終えた時点で蓮華はすっかり酔ってしまっ、笑い上戸みたいになってしまい、その騒ぎに気付いた雪蓮と冥琳もやってきて、そして半刻経って、先頭に戻る。

「まさか、蓮華がここまでとは……こんな所は史実通りとは……  
ハア」

「あ〜き〜ら〜」

「あきら……」

「おにいしゃま〜」

内心で溜め息をついていた輝螺だったが、左右後ろからの甘えるような声を聞くと、まあいいか、と思うのでした。

三人からの攻撃（お酌）を耐えきり、眠ってしまった三人を部屋まで連れて行くと、保護者組 + 喬姉妹の所に行った。

「輝螺様、お水です」

「お、ありがとな日華」

「それより輝螺殿も相変わらず酒に強いのう」

「ん、まあ、酒は嫌いじゃないしね」

「流石は月蓮の息子ね。わがまま言わないから輝螺君の方が優秀だけど」

祭と永琳はケラケラ笑っていたが、何故か輝螺は真面目な顔になる。場に合わないその表情に、月蓮達は首を傾げてしまう。

「どうしたの輝螺？いきなり真面目な顔しちゃって」

「うん。ちょうどいいから、話したい事があるんだ。母さんは知ってるだろうけど、まずは俺の生まれについて」

輝螺の言葉に月蓮ははっとした。酔いなどは一瞬で吹き飛んだ。

輝螺はそんな母親の表情を見ると話を続けた。

「俺は……孫家の血を引いていない」

「」「」「！？」」「」

この言葉には月蓮以外の皆を驚かせた。

そして唯一冷静な月蓮がゆっくりと口を開いた。

「……どこでそれを？」

「うん……あるヤツらから聞いたんだ」

「誰？今、その事を知っているのは、私だけのはずよ」

「違うよ。あと二人いる。鳳、凰、来てくれ」

輝螺が二羽を呼ぶと、まだ肉を食べていた鳳と凰はすぐにやってきた。

『なにー？』

「どうしたのいきなり？まさか鳳と凰が教えてくれたと言っつんじやないでしょうね？」

「うん。そうだよ母さん。この『二人』が教えてくれたんだ」

『ねえねえ何のことー？』

『まだボクのお肉残ってるんだけどなー』

「お前ら……気が抜けるような事言っつなって」

相変わらず呑気な二羽に、輝螺はげんなりしてしまっただが、それを見た月蓮達は目を見開いていた。

「あ、輝螺……貴方、もしかして……」

月蓮の問いに、輝螺も気を引き直して頷いた。

「それはもう一つ言いたかったこと。俺は動物の言葉が分かる」

今度は月蓮も絶句してしまった。

周りが騒がしい中、輝螺達の所だけ妙に静まり返っている。

「まあ俺が言いたかったのはそれだけだよ。生まれの方はともかく、能力の事まで母さんや永琳さん、祭姉には隠しておきたくなかったからね。だからもし、妖術関連で追い出すのなら、俺は文句はないし、復讐とかは考えてないよ。むしろ感謝して」

そこまで言っつて、輝螺は言葉を遮った、いや遮られた。月蓮に抱きつかれたことによつて。

「馬鹿ね……私がそんなことするわけじゃない……血が繋がってないからと言っつても……あなたが動物と話せるからと言っつても……」

…貴方は私の息子にかわりはないわ……」

抱きつかれて見えない月蓮の声は涙ぐんでいた。耳を澄ませば周りからもすすり泣きの音が聞こえる。

「母さん……」

「そうよ。私は貴方のお母さん……だから、出て行くなんて言わないで？」

「うん……そうだね。ありがとう、母さん……」

月蓮の優しい言葉に、輝螺の目からも涙が零れた。

この日、輝螺は本当の意味で、孫家の家族となれた気がしたのだった。

## 第一章 式

あの宴会から一週間程経ったある日、輝螺は市中を歩いていた。

因みに月蓮と雪蓮は仕事。永琳と冥琳はそのお目付役、蓮華と小蓮は勉強、祭は警邏、と言うように、珍しく輝螺一人の非番の日である。

とは言っても、鳳は肩に停まっているが。

そんな中、輝螺は何やら腕を組んで考え込んでいた。

『どしたの輝螺？考えごと？』

「ん？あ、いや何でもない」

鳳にはそう言ったものの、輝螺は宴会の時の月蓮の『補佐』という言葉を思い出していた。

補佐、というよりもパートナーだろう。

確かに輝螺にはそのような人物はいないし、そのような人物がいないと、これから大変になるのは解らなくもない。

『あ、もしかして最近輝螺がボヤいてるパートナー云々ってやつ？』

「……………なんで解る？」

『だっていつも部屋でボヤいてるもん。それなら明鏡みんけいでいいんじゃないの？ボクらの事知ってるし、というか、そのつもりで剣術教えてたんじゃないの？』

「いや、あれは散々せがまれたし、親父さんに作って貰ってる手前だし、それに護身用？」

『……ボクはてつきり誘う為に明鏡のトコに行ってるんだと思ってただけ……』

「今日は剣が出来たみたいだから取りに行くんだよ」

『ああ、あの真剣五本とナマクラ刀五本っていう鬼畜な注文？』

「お前……何気に言うな……」

そんなこんな（鳥と）話している内に、輝螺は目的の場所に着いた。

そこは鍛冶屋で、中からは鉄を叩く音が聞こえる。

「親父さん、いるかー」

輝螺が中に入って呼ぶと、奥からバタバタと走ってくる音がしてきた。

「輝螺くん、いらっしやい」

出てきたのは、長い髪の上に大きなベレー帽を膨らませたような帽子を被った女性が顔を出した。

「あ、明鏡。親父さんは？」

「まだ仕事が終わらないみたいなの。もうちょっとで終わるはずだから上がっててだつて」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

輝螺はそう言うと、奥の方の明鏡の部屋に入った。

「ごめんね輝螺くん。なんだか急な仕事みたくて」

明鏡は輝螺にお茶を渡しながら、済まなそうに言った。

この明鏡という女性、名は司馬徽、字は徳操、真名は明鏡、後々、《伏龍と鳳雛》と呼ばれた諸葛亮と鳳統を育て上げる、《水鏡先生》と呼ばれる人物である。

輝螺が剣の才覚を現し始めた頃から通っている鍛冶屋の主人の一人娘で、輝螺より二つ年上だが、輝螺と仲良くなり、いまや幼なじみのような関係である。

初め、司馬徽の名前を聞いた時は驚いたが、孫家が皆美女だったり、黄蓋が若くて美人だったりとしたので、すぐに慣れた。

性格はとても優しく温厚なのだが、親が刀鍛冶というだけあって、なかなか剣術が達者で、輝螺が剣術の天才と知ると、普段からは考

えられないくらい強情になって、訓練をつけてくれと頼み込んだ。

あまりの強情さに首を傾げた輝螺は、後日、親父さんに聞いてみたところ、親父さん曰く、『アイツは普段大人しくせに、本当にやりたい事となると、かなり強情になるときがあるからなあ』、らしい。

ともかく、輝螺は暇があれば明鏡に剣術を教えた。明鏡の元来の真面目さも功を奏して、明鏡の剣術は輝螺級になっていた。

「（そう考えると風の言うとおり、的確かも……）」

『ねーねー輝螺、人間になっていい？』

考え込んでいると、不意に風が話しかけてきた。

「ん？あ、ああいいぞ」

いきなり話しかけられたので少し慌てたが、輝螺は頷く。

それを聞いた風は輝螺の肩からピヨンと飛び降りる。

そして風の姿が歪んだかと思うと、次の瞬間にはそこには一人の女性が座っていた。

「うーん、やっぱりこっちのがいいねー」

その女性を見た目麗しく、波打つような長い金色の髪は、同じ長さの絹糸よりも艶やかで、肌は玉のように美しい。

この女性の正体こそ、鳳である。

この姿を初めて見たのは、輝螺が明鏡に剣術を教えている時であった。

明鏡の腕も上がってきて、実践的な戦い方を教える際に、模範として軽い戦闘を見せたかったのだが相手がいない。

仕方なくそれを諦めようとした所、見ていた鳳が、『じゃあボクがやるよ』と言って、いきなり人化したのである。

あまりに唐突だったため、輝螺も明鏡も軽く錯乱したが、聞いてみるとこれも聖獣化したことの副産物らしく、人化ができるらしい。

試しに後で鳳にも聞いてみたところ、『うん。僕も出来るよ。でもパス』と言っていた。

「ねーねー輝螺ー、ボクお腹空いたー」

「お前自由すぎ」

「ふふつ。でも確かにちょうどいい時間ですね。あ、そうだ。今日はお外にいきませんか？とつても美味しいお店があるって聞いたの。ちょうど、今日はたくさんお金が入りましたし」

明鏡は輝螺を見て悪戯そうに笑みを浮かべる。

明鏡の言うたくさんお金というのは、輝螺が持ってきた刀の代金である。

「いやまあいいけどな……親父さんに断らないとな」

「大丈夫です。許可は取っております。ちょっと『お願い』したら許してくれました」

曇りない笑顔を浮かべる明鏡が怖い。

仕事中の親父さんに声をかけ、三人は市街を歩いていた。（明鏡の笑顔を見た時の親父さんの震えが印象的でした）

「そう言えばその店ってどこにあるんだ？」

「それがね、裏通りの近くにあるらしくて、私も今までいけなかったの」

「どうしてそんな所に……よく潰れないな」

「それだけ美味しいんじゃないのー？ほら、早く行こーよ」

二人の話聞いて風が、待ちきれなくなったのか、輝螺の腕をグイグイ引っ張り出した。

「うおっ！？鳳、危ないから引つ張るな！」

「あらあら。うふふ、鳳ちゃん、そんなにお腹が空いたんですね。それじゃあ、ちよっと急ぎましょうか」

「笑ってないで助けてくれよ……」

輝螺は、自分と鳳のやり取りを見てクスクス笑う明鏡を恨めしそうに見つつ溜め息をついた。

しばらく歩いて、三人は目的の店の近くに来ていた。

「確かここら辺だと思っただけど……」

「しかし、本当に治安が悪い場所だな。確かにここじゃ女性一人じゃ来れないな。どうする？流石にこれ以上は危ないぞ」

「うーん……じゃあ、後少しだけ、だめかな？」

「じゃああと一本奥に入って無かったら他ん所な」

そう言つて、半ば薄暗い路地を歩いていると、先の方から怒鳴るような声が聞こえてきた。

「あ、輝螺くん……」

「明鏡はここで待ってる。鳳、明鏡を頼む」

「りょーかいだよ」

明鏡と鳳を残し、輝螺は一人、路地から出た。

すると、少し離れた所で柄の悪い男達が、一人の少女を取り囲んで怒鳴りつけていた。

「その者達！何をしている！」

輝螺はその集団に向かって叫んだ。

「何だテメエ！ガキは口出すんじゃない！」

「そうはいくか！一人相手に多人数で囲んでるような輩、許しておけるか！」

「うるせえ！おい！あのうっさいガキを黙らせる！」

輝螺の言葉にイラついた男の一人が、輝螺に殴りかかってきた。

「うおおおお！」

「んなのが当たるか、よっ！」

輝螺は眉一つ動かさずに、殴りかかってきた男の腕を掴み、そのまま一本背負いで投げ飛ばした。

「ぐぶっ！」

「んなっ！？っの、くそガキ！おい、お前らやつちまえ！」

仲間が投げ飛ばされたのを見てさらにキレた男達は、頭の男を残して全員が輝螺に襲いかかってきた。中には武器を持っている者もいる。

そんな圧倒的に不利な状況下においても、むしろ輝螺は溜め息をついた。

「まったく……めんどくさい……」

「うおおおお」

「！！！！！！」

男が迫る中、輝螺は目を閉じて腰の刀に手をかけると、

「うるさい邪魔だ」

次の瞬間、輝螺に襲いかかろうとしていた男達は全員、地に伏せていた。

「え……？ は……？」

頭の男もなにが起きたか解らず呆然としている。

輝螺はそんなの気にせず、地に伏している男達を見る。男達は皆痛みにも悶えながらも、誰一人として気を失っていない。

そんな男達を見ながら輝螺は口を開いた。

「足と刀に氣を十分に込めての居合い。今回はナマクラ刀だし、手加減してやったからそれくらいで済ましてやるが……次はない。言っておくが、ナマクラ刀であろうと、やる気になれば切れるぞ」

そう言つて一睨みすると、男達は皆ヒィと震え上がり、我先にとフラフラしつつも蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「お、おい！ お前ら逃げんじゃねえ！ おい！聞いて」

「さて、後はお前一人か」

輝螺の言葉に頭の男は叫ぶのを止めた。

「聞いてたよな。やる気になればお前一人くらい楽に殺せる。それに突きならやる気なんか出さなくても殺れる。さ、どうする」

そう言つて刀を突き出す輝螺。男は舌打ちをしたが、自分のすぐそばにまだ少女がいることに気付く。男は気づくやいなや、少女を自分の盾になるように引き寄せ、首筋に小刀を当てる。

「動くな！コイツがどうなつても」

「良くないから離してもらおう」

形勢逆転したと確信していた男は、すぐには自分が宙に舞っていることに気付けなかった。

「ぐはっ！」

そして気付いた頃には地面に叩き付けられていた。

「ふむ、見様見真似だが出来るものだね」

「おい、大丈夫か？」

少女が自分の腕と男を見比べている所に輝螺が安否を尋ねる。

すると輝螺に気付いた少女は、大丈夫だと言って笑みを浮かべた。

見ればこの少女も美人で、薄紫色のセミロングで、口元の黒子ほくろが少女らしからぬ妖艶な雰囲気醸し出す。実際は輝螺と同年くらいであろう。

「それにしても助かったよ。キミが来てくれたお陰で大分楽が出来たよ」

少女は傍らに落ちていた袋を拾うと、再び輝螺に笑いかけた。

「お礼といつてはなんだが、ご馳走しよう。そこに隠れている二人と……そこに倒れているゴロツキ君もだ」

少女は、輝螺だけではなく、こっそりと覗いていた明鏡と凰、そしてさっきまで絡まれていた男にまで声をかけた。

予想外のことに、輝螺だけではなく、路地から出てきた明鏡と凰、そしてまさか声をかけられるとは思ってもしなかった男もポカンとしてしまった。

それを見て、少女は嬉しそうに笑って言った。

「自己紹介だ。私は管輅。字は公明。すぐそのの《北窓》ほくそうの店主だ。お腹が空く者は皆歓迎するよ」

そう言うと、少女・管輅は微笑んだ。

「おかわりー！」

「うん、そう言つと思つてたから用意しておいたよ。今度は特製炒飯だ」

「わーい！」

凰が満面の笑みを浮かべながら、炒飯を食べる（おかわり四回目）。

ここは、先程の場所から少し歩いた所にある屋台。

その席には輝螺達三人とゴロツキの男が座っていた。

「さて、君達にも感想を聞かせてもらつよ。どうだい、孫仁さん？」

「うん。美味しいよ。もしかしたら祭よりも上かも」

「黄蓋將軍だね。でも駄目だよそんな事を言つては。怒られてしまつからね」

「あれ？知ってるのか？」

輝螺は何気なく黄蓋の名前を出した管輅に首を傾げたが、管輅は何をいまさらというように苦笑した。

「自分がいる国の武将の名前くらいなら覚えてるだろう、普通？それに君達はいつも真名で呼び合っているじゃないか。そりゃ覚えてしまつよ」

「そう言えばそうだな」

輝螺はケラケラ笑いながら、お茶を飲んだ。

食べ終わってお茶を飲みながらそれを見ていた明鏡がポツリと呟く。

「何だか輝螺くん、管輅ちゃん、とつても仲がいいんですねー……」

「ん？ そうか？ まあ確かに気は合うかもな」

輝螺が満更でもなさそうに答えると、明鏡は何だか面白くなさそうに口を尖らせた。

輝螺はそれに気付かなかったが管輅は気付いたようで、面白そうに眺めていた。

「さて、さっきから黙って食べてるゴロツキ君。お味はどうかかな？」

管輅は黙っていたゴロツキに話しかけた。

「……………」

「おやおや、黙りかい？ま、おかわりは自由だよ。孫仁さんが払ってくれるからね」

「おい」

管輅の言葉に輝螺は反応したが、管輅はただ笑っただけ。明鏡は明鏡で、ふてくされているので輝螺を助けようとはしなかった。

そんな光景を黙って見ていたゴロツキだったが、目をそらすと、空

の皿を管輅に差し出した。

「……………あの嬢ちゃんが食ってるやつをくれ」

「っぶ、ははは。了解だゴロツキ君」

それを聞いた管輅は、嬉しそうに笑いながら炒飯を作り始めた。

皆が（と言つか凰が）食事を終えて食後のお茶を飲んでいる中、輝螺は少し考え事をしていた。

「（明鏡……………司馬徽に加え、管輅か……………。明鏡が優秀なのはしってるが、管輅と言えば大陸一の占い師。それにさっきの見た限りじゃ武の方も中々みたいだし）」

「ん？ どうしたの輝螺くん」

輝螺が考え事をしているのに気付いた明鏡が首を傾げていた。

「んー……あ、そうだ。なあ  
管轄、卵ってあるか？」

「なんだいいきなり？ まああるにはあるが……いくつだい？」

一人一つ分と言って、受け取った卵を一人ずつに渡す。

そして最後に自分の手元に残った卵を管轄に渡す。

「ん？ 私もかい？」

「ああ。ちよつとした謎かけみたいなものだよ」

「謎かけ？」

明鏡が首を傾げるのを見てニヤリと笑う。

「そ。なに簡単なことだ。なにも使わずに卵を立たせてみてくれ」

「うん、私は解ったぞ」

「ボクもー」

「ちよ、ええ？ 早くね!？」

自信たっぷりと言っやいなや、二秒と経たない内に管輅と鳳に解かれて輝螺は愕然としてしまった。

「ボクは知ってたからね。コレってハンコの国と間違えてお米の国を発見した人の卵でしょ？」

「（ハンコにお米……………。これはコロンブスの卵だから……………もしかして『インド』と間違えて『アメリカ』を発見したと言いたいのか、コイツ）」

「おーい、孫仁さーん」

「…かなんでコイツ鳥だったのに人間について詳しいんだ、と思っていると、管輅が輝螺に声をかける。

「あ、すまんすまん。それよりも、よく解ったな」

「確かにコレはむずかしいけどね。私も旅をしているから、色々特技を身に付けているんだ。コレもその内の一つでね。案外ウケがいんだ」

「ああ、確かに路銀稼ぎも大変そうだしな。他に特技あるのか？  
占いとが」

「占いもできるけど、一番稼げるのはやっぱり音楽かな。特に琵琶は得意でね。これは少しばかり自信があるよ。どれ、二人はまだ時間がかかりそうだし、待つてる間に一曲演奏してみようか」

管輅はそう言つと、どこからともなく琵琶と笛を取り出した。

「ほら。君も出来るのだろう？ 本来は二胡弾きみたいだが」

「出来るが……なんで知ってるんだ？」

笛を受け取りつつも、輝螺は怪訝な顔をした。そんな輝螺の顔を見て、管輅はフフンと笑った。

「言つたろう？ 私は占いが得意だつて。この位朝飯前さ」

管輅はそれだけ言うと、琵琶を持って広いところに出てしまったが、輝螺は驚いて固まってしまっていた。

「（まさかここまで凄いとはな……。大陸一の占い師とは知ってたが、一目見るだけでここまで分かるとはな……。明鏡の実力を見るつもりが、まさかもう一人、非凡な人物を見つけるとはな……。……ん？」

ふと視線をずらすと、店の暖簾の『北窓』の文字が目に入った。

「うーん……そお……つと……ああ！」

それから卵に四苦八苦している明鏡を見て、輝螺は思わず微笑んだ。

「孫仁さん、どうしたんだい？」

「いや、今行くよ」

準備を終えて待っていた管輅の方へ向かいながら、輝螺は思う。

「（白居易の三友か……。なら、俺が酒で、管輅が琴、明鏡が詩、  
つてとこか。ふっ、後で美味しい酒でも用意しておくか）」

この後、明鏡が見事コロンブスの卵の種に気づき、それを嬉しそう  
に見る輝螺が明鏡を、そして管輅を将に誘ったのだった。

「じゃあ俺は今日は帰るな」

二人を将に誘った後、輝螺は席を立った。

すると、輝螺はゴロツキに声をかけた。

「あ、そうだ。ゴロツキ君よ。仕事ないなら俺の隊に来るか？」

「え？」

今まで黙っていたゴロツキは、輝螺の言葉に間の抜けた声をあげた。

「今度、本格的に俺が選抜した面々で構築した、先鋭隊を作るつもりなんだ。お前もゴロツキの頭になってたんだからそこそこ強いだろうし、本格的に訓練すれば、更に強くなるだろうしな。どうだ？俺のトコに来るか？」

輝螺は言い終わるとゴロツキの目を見極めようとするかのようにジッと見つめる。

ゴロツキは輝螺の視線の厳しさにたじろいだが、グッと目に力を入

れると、輝螺の前に跪いた。

「俺の命、孫仁のダンナに預ける。こんなクズのような俺を拾ってくれたダンナには死ぬまで仕えよう。俺は楽禁<sup>らくきん</sup>。字は志在<sup>しざい</sup>、真名は賦義<sup>ふぎ</sup>だ」

ゴロツキ改めて賦義の言葉を聞いた輝螺は賦義に笑いかけた。

「俺は孫仁。字は江武、真名は輝螺だ。管輅も俺のことは真名で呼んでくれ」

「なら私もキチンと挨拶をしておかねばな。私は管輅。字は公明、真名は光だ」

「あ、じゃあ私も教えなきゃね。私は司馬徽。字は徳操で真名は明鏡だよ。よろしくね」

輝螺に続いて管輅、明鏡と名乗ると、突然凰が輝螺の服をちよいちよいと引つ張った。

「ねえねえ輝螺。ボクの真名、つけてくれない？」

「真名を？ いきなりだな」

すると凰が珍しく寂しそうな表情を浮かべた。

「えっとね。いつも輝螺と明鏡が真名で呼び合ってるのを見てたら、何だか羨ましいなー、って思ったんだ。姓と名と字は決めたんだけど、やっぱり真名は輝螺につけて欲しいな、って」

いつも明るい凰が、こんなにも寂しそうな表情を浮かべるのを見て、輝螺は安心させるような笑みを浮かべると、凰の頭を撫でた。

「あ……」

「ごめんな気付けなくて。そんなに寂しがつてるとは思わなかった。許してくれ」

輝螺はそのまま凰のことを抱きしめると、耳元で凰にだけ聞こえるように呟いた。

「灯だ」

「え？」

「だから、灯。《灯》って書いて《あかり》だ。元気なお前にはピツタリだろ？」

輝螺は風を放すと、ニヤリと微笑んだ。

その表情を見て風はポカンとしたが、恐る恐る口を開いた。

「ま、まさか輝螺……ボクが気にしてること……」

「いや、それは本当に気付かなかったよ。でも、十年以上温めてきたんだ。お前に似合いそうな真名はコレだって」

「へ？」

予想とは違う答えが返ってきて、なおかつ予想を遥かに上回る答えが出てきて、風はついに固まった。

「ふふつ。だから、俺は喋れるようになる前からずっと考えてたんだよ」

輝螺の言葉が徐々に頭の中に染み込んでいくと共に、風の表情も徐々に笑顔になっていった。

「そつかそつか！ ふふふつ、灯、灯かあ！ うん、最高の真名だよ輝螺！」

ピョンピョンと嬉しそうに跳ねて喜ぶと、風は光たちの方を向いた。

「皆さんお待ちせ！ 最後はボクだね！ 姓は清、名は鳳、字は朱紅、そして真名は灯だよ！ よろしくね！」

この時の鳳 - 灯の笑顔は今までで、最高のものだった。

後日、灯に姓と字の由来を聞くと、

『《清》の文字は輝螺の清涼院から取って、《朱紅》は、孫仁の《仁》の文字が《五常》の一つだから、それに通ずる《朱雀》から、そしてボクの羽の色が《紅》だからね。だから《朱紅》にしたんだ』

意外によく考えられていたことに驚いていた輝螺だったが、灯はそれを気にせず続けた。



「輝螺、今日は何してたの？」

「何って……頼んどいた刀を受け取りにいったくらい？ まあ、裏通りの店で、色々あったけどね」

「そうだったの？」

輝螺の答えが予想外だったらしく、永琳が意外そうな顔をした。

しかし月蓮はそれでは不満らしく、まだ怖い顔をしている。

「そうね。じゃあもう一つ聞くわ。市街で一緒に、腕を組んで仲睦まじく歩いてた、絶世の美少女、ってだれ？」

「絶世の美少女？ …………… ああ、灯か？」

「誰なのじゃ、あのおなごは。ワシは初めて見たぞ」

「誰って言われても……と言うより、どうして責められてるの俺？」

いつの間にか部屋の隅の方まで追いやられている輝螺。何とか空笑いしているが、汗せらだらである。

一方月蓮達は、妖しく艶やかな笑みを浮かべ、さらには舌嘗めずりまでしている。

「あ、あの……灯は、その、別にそーゆー関係じゃ、あ、なんかイヤな予感が……」

「多分当たりよ輝螺くん　未亡人はお好みかしら？」

顔を上気させた永琳が輝螺の右腕を抱えて自分の胸を押し付ける。

「そうじゃな。あのおなごがどうかと言う前に、儂等が抱けばよいな。輝螺殿、年甲斐もなく生娘なのだが、ガツカリしないでください。むしろ、二人にはない締め付けはきつと気持ちいいですよ」

祭も自慢の胸を輝螺の左腕に押し付け、さらには輝螺の左腕を自らの股の方へと導いた。

「輝螺」

あまりに突然で、かつ衝撃的な出来事が立て続けに起き、ショートしている輝螺の頭に月蓮の音が響く。

輝螺はハッと意識を取り戻して最後の希望に迫いすが。

「か、母さ……っ」

「輝螺………」

近親相姦って、燃えるわよね？」

「ちよっ！？　なに言ってるのこの人は……って、永琳さんに祭ねえ！　アンタらも人の手で自家発電すんな！　ちよ、そっちは寝だ、いや、グイグイ引つ張らないで、って……アアアムグツ！？　ウウー……！」

哀れ、希望と思っていたものは、逆に絶望を導き。

輝螺の部屋では一晩中、女性の艶めかしい嬌声と口籠もった声が響き続けたのであった。

因みに、灯や明鏡達のごことは、やり尽くした後しっかり説明した。

そしてその後、紹介したい面々が全員女性だと知り、お三方から怒りを買った輝螺は限界突破した最終ラウンドに突入したのだった。

## 第一章 参

「ううう、何だが緊張してきました」

「うーん……ボクはヘンな気分かな？」

「ああ、灯くんはここに住んでるんだもんな。私は楽しみだな。孫家の城に入ることなどそうそうないからな」

「そっか。あ、でもボクの正体は秘密だよ？」

「分かってるよ。承知している」

輝螺が明鏡たちを誘った次の日、その明鏡と光、そして灯は城の前にいた。

もちろんその目的は仕官することである。

因みに、初め灯は仕官するはずではなかったのだが、そんなこんなで灯の存在が知られてしまったので、灯も仕官することになったのである。

ということ、口裏を合わせるために、光には灯の正体をバラしたのである。

「まあ、こんな所で話しては怪しまれるだけだし、早く行こう」  
光はそう言うと門番に声をかけた。

「いきなりだが失礼する。私は管公明。孫仁殿に呼ばれて来た者です。お通し願いたい」

だが、それを聞いた門番は訝しげな顔をした。

「孫仁様に？ そんな話は聞いておりませんが」

「え？ 聞いてない？ ほ、本当に？」

光もそう返されるとは思わなかったので、素っ頓狂な声をあげてしまふ。

「はい。しかし、貴女が嘘をついている  
訳ではなさそうですし、確認して参ります。この場でお待ちください」

門番はもう一人の門番に一言二言告げると、城の中に入っていった。  
待っている間、光達は首を傾げていた。

「どうしたんだろう？ 輝螺くん、こういう事はしっかりしてるの  
に」

「まあ、たまにはあるんじゃないかといふ言いがたないが……ん  
？ どうした灯くん。ヘンな顔をして」

「えっ！？ な、何でもないよ。大丈夫大丈夫」

多少首を傾げつつも、光は明鏡と話し始めた。

それを横目にしつつ、灯は気付かれないように溜め息をついた。

「（これってやっぱり、『アレ』だよねえ……輝螺、朝までやってたみたいだしなあ……流石はよんぴい……しかも筆卸し……ご愁傷様です）」

灯が心の中で手を合わせていると、先程の門番の兵が戻ってきて、月蓮の所まで案内します、と言われたのだった。

所変わって玉座の間。

「輝螺……どうしたの？」

輝螺は傍目に分かるほど干からびていた。  
理由は言わずもがな。

「だ、大丈夫さ……冥琳。ただ、水か何かを貰えると嬉しい……」

それから冥琳に呼ばれた日華から水を受け取ってようやくいつもの戻った輝螺。

それを確認すると今度は雪蓮が輝螺に話しかける。

「でも輝螺。どうして皆を集めたの？」

雪蓮の言う通り、この部屋には月蓮を初めとした孫呉の主な武官文官が集まっている。さらにはまだ将ではない蓮華と小蓮もいる。

「あれ？ 聞いてないのか？」

「ええ。いきなり母様に呼ばれたのよ」

それを聞いた輝螺はジト目で月蓮を睨んだ。

月蓮はばつが悪そうにそっぽを向いてしまったので輝螺は溜め息をついた。

「まあいいか。でもまあそろそろ来るだろうし、実際に見れば分かるし、今は秘密だ」

すると扉の方から先程来た兵の声が聞こえた。

輝螺は、ほらなと雪蓮に目配せすると、返事をした。

失礼します、と声が響くと、入ってきたのはその兵と、少女三人 -  
- 光と明鏡と灯の三人だった。

兵が下がると三人は月蓮の前に跪く。

月蓮は先程までのふざけた雰囲気を消し去ると王の威厳をもって口を開いた。

「顔をあげよ。そして名を名乗れ」

月蓮の声はまさに王の覇気を含んでおり、並の武官文官達は汗をかいている。

だが光達は微塵も動じず、顔をあげた。

「私は管輅。字は公明。真名は光です。」

「私は司馬徽。字は徳操で真名は明鏡です」

「ボクの名前は清鳳」

。字は朱紅。真名は灯です」

三人が真名を名乗ると、皆は驚いた。だが月蓮が腕をあげるとすぐに静まる。

「管輅、司馬徽、清鳳。どうして真名まで名乗った」

「私たちは孫仁殿と真名を交換しています。ならば孫仁殿が認める方々に真名を託すのは必然」

光が話し終わると、月蓮は輝螺をチラリとみる。すると輝螺は頷いた。

それを見ると月蓮はふうと小さく息をつき、覇気を止めた。

「そこまで輝螺が信用しているなら私も信用できるわ。私は孫堅。字は文台、真名は月蓮よ。光、明鏡、灯。貴女達を孫呉の将として迎えるわ。これからよろしくね」

「「「はい!!」「」」

三人の返事に月蓮は嬉しそうに微笑む。これで全てが終わったかと思っただが、輝螺が細長い包みを持って前に出た。

「輝螺？」

「母さん、ちょっといいかな」

「え？ あ、いいわよ」

突然だったので、少し困惑した月蓮。だが輝螺は月蓮の許可をとると、皆が見えるように通路の真ん中に立った。

「自分で言うのも何だが、今回の件は完全に俺の独断かつ急なこと、よく分かっている者も多いだろう。もしかしたらまだ三人の

ことを認められない者がいるかもしれないし、いても仕方がない。だがいつまでもそれでは様々なことに支障をきたす。だから……」

そこまで言うと輝螺は、持っている包みをほどく。

そこから出てきたのは三本の刀。

輝螺はそれをそれぞれ一本ずつ三人に渡す。そして皆の方へと向き直る。

「これから三人の実力を見るために、試合を行う。誰か手合わせしたい奴はいるか」

輝螺は声に覇気を込めながら皆に尋ねた。その覇気に、多少腕に覚えがあるくらいの武官では動くことも出来ない。

そんな中、一歩前に出たのは二人。

「輝螺殿がそんなに期待している者となら、一度は戦ってみたいのう。この黄公覆、武人としてお相手いたそう」

「輝螺が推薦する人なら心配はないとは思うけど、やっぱり自分の目で確かめたいわ。家臣となる者の實力を知ることが、孫文台の娘として、孫伯符として大切な役目だわ」

その二人とは、共に闘気を滲ませた雪蓮と祭であった。

やる気満々の二人を見て、輝螺は嬉しそうに微笑んだが、すぐに気を引き締め直す。

「あと一人は……いないみたいだな。まあいいか。ではこれから三刻後、兵士の調練場で行う。悪いが、それまで調練場を貸してもらおう。いいか、母さん？」

「ええ。兵の方にはその間は休憩と言っておいて」

「ありがとう母さん。そう言う事だ。俺と明鏡達は先に調練場に行っている。皆は三刻後に来てくれ」

そう言うと輝螺は三人を連れて部屋を出て行った。

輝螺が指定した時刻になり、雪蓮達は調練場に向かった。

そこには輝螺達四人がいたが、光だけは汗をダラダラ掻いていても荒くなっていた。

「あ、輝螺！」

「お、来たか」

「来たか、じゃなくて！　なんで管輅はそんなに汗掻いてるのよ！　これから試合をするのに大丈夫なの？」

雪蓮は行き絶え絶えの光を心配そうに見ていたが、輝螺は別段気にした様子はない。

「大丈夫だよ。……さて、早速だけど始めようか。じゃあ初めは……」

「わ、私にやらせてくれ……」

今まで膝に手をついていた光が、輝螺の前に立った。

「行けるのか？」

「ああ。こんなに気分が高ぶっているんだ。早く戦いたいぐらいだ」

光は明らかに疲れ果てていたが、その瞳と声は爛々としていた。

それを見た輝螺は満足げな笑みを浮かべると、祭と雪蓮の方を見た。

「じゃあ二人はどっちが出る？」

するとすぐに祭が前に出てきた。

「ワシにやらせていただくこう！ というか戦いたい！」

祭は笑顔でそう言うと、雪蓮の話を聞く前にズンズン光の前に行つてしまった。

「あー……行っちゃったよ。よかつたのか雪蓮？」

「まあ仕方ないでしょう？ ああなっちゃったら祭、止まらないじやな」

「？」

「確かに。あんなにワクワクしてる祭は久しぶりだ」

雪蓮はそれに、と、少し離れた所で目を閉じて集中しながら待機している明鏡を見た。

「それに、あの娘とも戦ってみたかったしね」

そう言っていると雪蓮はペロリと唇を舐めた。

なんだかんだ言っていたとはいえ、流石は月蓮の娘。

戦闘に対する態度は親子共々、そっくりである。

「で、輝螺くんの予想は？」

後ろから突然話しかけてきたのは永琳。

「どうでしょうかね。祭姉は孫呉で上位にいる武将ですからね」

「でも負けるとは言い切れないのね？」

永琳は意味ありげに微笑んだ。輝螺はそれを見ると、降参というように両手をあげた。

だが雪蓮はよく分かっているのか、首を傾げていた。

「え？ 輝螺、自信があつたんじゃないの？」

「まあ、自信はあるけどな。祭姉だつて強いし、なんたつて光に会つたのは昨日が初めてだしな」

「え！？ そうだったの？」

「ああ。明鏡とか灯は別だけどな。それに灯以外は、どっちかとい  
うと軍師派だしな」

「軍師？　ちよ、ちよっと、それじゃあ危ないじゃない！」

「まあ見ておけ。それが一番早いからな」

慌てる雪蓮をよそに、輝螺は光と祭の方に行ってしまった。

一方、光と祭はお互いに笑みを浮かべていた。

「黄蓋將軍がお相手ですか」

「うむ。お主のような猛者とは中々出会えぬからな」

「そう言われると光栄ですよ。さあ、始めましょう。今度こんなに高ぶるのは何時だか分かりません」

そう言うと光は刀を構える。

「ほう！　なら、それに居合わせたワシは幸運じゃのう！」

祭も答えるように弓に矢をつがえる。

それを見た輝螺は苦笑しながら二人の間に立った。

「おいおい二人とも。気が早すぎじゃないか？」

「そんな事ないさ。それより輝螺さん。早く始めよう」

「そうじゃぞ輝螺殿。ほれ、早よう合図を出してください」

二人が爛々と瞳を輝かせているのを見て、輝螺は呆れ混じりに溜め息をつくくと、少し下がった。

「はあ……じゃあ二人とも、準備はいいか？」

二人はお互いを見つめながら頷く。

「それでは、初めっ！！」

輝螺の合図と同時に、祭の矢が放たれた。

始まるや否や放たれた二本の矢。

だが光は、その二本の矢を紙一重で避けると、一気に祭に詰め寄った。

祭も即座に反応し、腰の剣を抜き、光の刀を防ぐ。

「ほう、やるのう」

「黄蓋將軍の弓矢も、素晴らしかったです」

お互いニヤリと笑うと、斬り合いを再開した。

「おおお!!」

「はああ!!」

目にも留まらぬ速さで剣を切り結ぶ光と祭。光が離れると、即座に矢を放ち、光もかわし、時には刀で切り落とす。

息をも吐かせぬ、全てが紙一重の戦いで、一瞬も油断できない状況だが、二人はそんな中でも笑っていた。

「い、いくら祭が弓使いだといっても、あそこまで互角なんて……  
輝螺、あの子はいい……」

孫呉随一の實力を持つ祭と渡り合う光の姿を見て、思わず息をのむ永琳。

輝螺もまじめな顔をしている。

「俺もそこまで詳しくはないです。でも、確実に分かるのは、光は武術全般の才能があり、それを吸収する速度も常人の、それどころか、才ある者の遙か上をいきます。現に、あの剣術もさっきの三刻で叩き込んだものです」

「なんですって！？ あれはどうみても、熟練者のモノよ！ そんなことはあり得ないわ！」

永琳はあまりの驚きに叫んでしまう。  
だが輝螺は未だ落ち着いたままである。

「確かに、旅で身を守る必要があったみたいだから、普通の剣術の腕はあったが、あの刀は、祭姉が使ってるのとは、使い方が違うんだ。確かに今、光達が持つてるのはナマクラ刀だけど、あの形状の刀を使ったのは、さっきが初めてだ」

これを聞いた永琳、そして雪蓮は絶句した。何せ、先ほど光は、猛スピードで迫る矢を切り落としていたのである。

それをナマクラ刀でやってのけているのだから、光の力がよく分かるからだ。

そんな固まる二人をよそに、輝螺は光と祭の方に視線を戻す。

「（しかし、強いとは思ってたけど、祭姉と互角とはな。テンションが最高になってるにしても、日本刀初心者だし、金の卵だな、こ

りゃ）」

輝螺は、光の非凡な才能を見て、嬉しく感じていたが、一方で、この勝負の勝敗についても感じていた。

「……そろそろ、か」

そう呟くと、少し前に出た。

息を吐かせぬ接戦を繰り広げていた二人は、今お互い離れた場所に立っていた。

今や祭の矢は尽き、持っているのは剣。

片や光も疲労はピークに達しており、立っているのもギリギリである。

「はあ……はあ……お主、やるのっ……」

「黄蓋……將軍こそ……流石、です……」

二人は既に、自分の体力の限界を感じていた。二人は気力で立っているようなものである。

しかし二人とも、いわゆる『精神が肉体を凌駕している』状態になっていた。

「管輅よ！ そなたの武勇、実に見事！ 故に、ワシの真名を授ける！ ワシの真名は祭じゃ！」

祭は剣を構え直すと、声を上げて光に突っ込んでいった。

「……ならばこの管公明、我が渾身の一撃を」

光はそう言つと、自分も突っ込んでいった。

「はあああああつ！！」

二人の叫び声の後、鉄と鉄が打ち合う甲高い音が響いた。

そして回転しながら空中を舞う刀剣が一本。

それが地面に落ちて突き刺さる………前に、輝螺がそれをキヤツチする。

「ふう……。大丈夫か、光？」

「ああ、輝螺さんか。うん、大丈夫、って言いたいけど……すまないね、立てそうにないや」

- - 輝螺が手にしているのは日本刀。

光は地面にペタンと座りながらアハハと苦笑する。

それを見た輝螺は、仕方がないと言うように苦笑すると、高らかに声をあげた。

「勝者、黄蓋!!」

一瞬の静寂の後、調練場は割れんばかりの声援に包まれた。

「いやいや、すまないね輝螺さん」

試合が終わった後、光は疲労が溜まりすぎてぶっ倒れたので、明鏡の隣に寝かせられていた。

輝螺の膝枕で。

初めは普通に医務室に連れて行こうとしたのだが、光が明鏡や灯の試合を見たいと言い出したので、仕方なくこうしたのであった。

「はぁ……。それより明鏡、どうだ、いけるか？」

今更何を言っても無駄なので、輝螺は明鏡に話しかけた。

「うん……。出来れば、あと一刻……」

明鏡は目を閉じたまま言う。それを聞いた輝螺は、光を膝枕したまま声を上げた。

「分かった。雪蓮！ 次の試合は、一刻後だ！ 準備してくれ！」

一方こちらは月蓮達。

祭は用意されていたイスに座っていた。

そんな祭に、月蓮が話しかける。

「祭、貴女から見て、どうだったかしら？」

「そうじゃのう……剣の腕に関しては素晴らしい。聞けば、あの輝螺殿がいつも使ってる刀という剣、光が手に取ったのは今日が初めてみたいだが、とてもそうは見えぬ。間合いの取り方、剣閃の鋭さ、そして速さ。そのほとんどにおいて、達人のそれじゃ」

祭の説明に一同は、輝螺に膝枕され

ながら、ニコニコしている光を見て息を呑んだ。

だが祭はニヤリと笑って続ける。

「じゃがのう月蓮殿。あの管輅という人物。私達と同じ匂いがしますぞ。普段は今のよう冷静そうですが、光のやつ、ワシと戦っている間は、楽しそうに笑っておいりました」

それを聞いた月蓮は、あら、と嬉しそうに頬を綻ばせる。

「ふふ、輝螺くんだったら、とても良い人物を見つけたわね」

「まさか、こんなに早いとは思わなかったけど。流石は私の息子」  
月蓮が誇らしげに輝螺の事を見ている横で、雪蓮は戦いに向けて準備をしていた。

そんな雪蓮に、月蓮は声をかける。

「雪蓮、もう行くの？」

「ええ。祭達のを見てたら、私もワクワクしてきたわ」

雪蓮は笑顔だったが、目だけは獲物を見つけた虎のようにギラついていた。

そのまま、調練場の真ん中に行く雪蓮を眺めていた月蓮だったが、視線を明鏡にズラした。

「ねえ祭」

「ん？ 何じゃ？」

「貴女から見て、あの子はどう思う？」

月蓮は、雪蓮と同じく準備を終えて前に出てきた明鏡を見ながら祭に尋ねた。

「あの子というのは、雪蓮殿か？ それともあの司馬徽という者の方か？」

「もう、わかってるくせに。いいわよ、この際だから、両方につい

て言いなさい」

祭はケラケラ笑うと、汗を拭いていた布を首にかけると、二人の方を見る。

「雪蓮殿は言わずもがな、流石は月蓮殿の娘。その氣はまさに虎の如き猛々しさ。あの若さでこの強さとは、将来が楽しみですね」

「じゃあ、司馬徽は？」

月蓮の一言に、祭は難しそうな顔つきになる。

「そうじゃのう……あの娘の氣、

我らよりも高いかもしれませぬ」

祭の喧きと同時に、雪蓮と明鏡の戦いが始まった

「勝負あり!!」

調練場に輝螺の音が響く。

周りの者達は、自分の目の前に広がる光景を信じられないでいた。

「う、嘘……」

「み、見えなかったわ」

「……まさか、これほどまでとは」

それは月蓮達も同じだったようで、啞然としていた。蓮華や小蓮に  
いたっては、声すら出せなかった。

「勝者、司馬徽!」

再び調練場の中に、輝螺の音が響く。

そして、明鏡の後ろには、倒れ込んだ雪蓮の姿があった。

「はっ、雪蓮!」

輝螺の声に正気を取り戻した冥琳は、慌てて雪蓮に駆け寄った。

「雪蓮！ 雪蓮！ 大丈夫か！？ 雪蓮！！」

「落ち着け冥琳。雪蓮は気絶しているだけだ。心配はいらない」

少々興奮ぎみの冥琳に、輝螺は安心させるように雪蓮を起こした。

すると少し汗は掻いているものの、雪蓮の呼吸は落ち着いていた。

「でも、医務室につれてかないとな。冥琳と……おい！ 誰か雪蓮を医務室に連れて行ってくれ！！」

輝螺は何人が兵士を呼ぶと、雪蓮を運ぶように指示する。その時冥琳も一緒に着いていった。

残されたのは輝螺と明鏡。

「明鏡、お疲れ様」

「うん。ありがとう輝螺くん」

明鏡は刀をしまうと、にこりと微笑んだが、すぐに不安げな顔になった。

それを察した輝螺は、ポンと明鏡の頭に手を乗せた。

「大丈夫だって。雪蓮も武人だ。すぐに目を覚ますよ。ほら、そん

な顔してないで、光の隣に座ってるって」

「うん……ありがとう輝螺くん」

明鏡はそう言うと、光がいる方へと歩いていった。

輝螺はそれを見届けると、なぜか月蓮達の方に来た。

「ん？ どうしたの輝螺？」

何故自分の方に来たのか分からなかった月蓮は首を傾げた。

そんな月蓮を見て、輝螺は思わず苦笑してしまった。

「いや、灯を呼びにきたんだよ」

「え？ あの子ならここじゃなくてあっちに……って、あら？ どこに行っただのあの子？」

月蓮は明鏡達の方を指差したが、そこには明鏡と明鏡に膝枕してもらっている光の二人だけ。さっきまでジツとして観戦していた灯はいなかった。

さっきまでいたのに、と首を傾げる月蓮を見て、耐えきれなくなった輝螺は、思わず吹き出してしまった。

「む、なによ輝螺。さっきから変よ？」

「そうね。どうしたの輝螺くん？」

笑われてムツとした月蓮に加え、隣にいた永琳も不思議そうな顔をして輝螺を見る。

「はは、ごめんごめん。ほら、灯もそのくらいにしておけ。次だから準備しておけよ」

輝螺は月蓮に謝ると、月蓮と永琳の間辺りに声をかけた。

「輝螺くん？ 誰に話しかけて……」

「はい。でもボクの相手って誰なの？」

「「「!?」」」

突然現れた灯に、すぐ隣にいた二人はもちろん、少し離れた場所にいた祭も驚いていた。

「まだ秘密だ。一刻後でいいか？」

「うん。じゃあ体温めてるね。明鏡ーっ！ 手伝ってーっ！」

灯は元気良く返事をする、明鏡の所へ走っていった。

輝螺も準備を始めようとすると、月蓮に呼び止められた。

「あ、輝螺。今のはなに？」

「うーん……試合が終わったらちゃんと説明する。でも多分、祭姉なら思い当たることがあると思うけど」

そう言うと、輝螺は歩きだそうとした。

「ちょっと輝螺くん！？ どこに行くの？」

「ん？ 準備ですよ永琳さん」

「準備って……何の？」

永琳の問いかけに輝螺はニヤリと笑った。

「決まってるでしょう？ 戦いの準備です」

輝螺が調練場に戻ってきたとき、輝螺は日本の刀を持ってきていた。それに気づいた灯は、素振りするのを止めて、輝螺のそばまでやってきた。

「輝螺、もう始めるの？というか、ボクの相手って誰なの？」

「相手は俺だよ」

相手が輝螺だと知ると、灯は目を輝かせた。

「輝螺と！？ 久しぶりだね」

「ああ。それで真剣でやるか？」

「もちろんだよ！ 輝螺は《螺鈿》使うの？」

「ああ。お前相手じゃ手加減も出来ないしな」

灯は刀を受け取ると、すぐに抜いて軽く素振りを始めた。

「うん。流石はおじさん。かなり良いね。どうする輝螺、ボクはすぐに始めてもいいけど」

「ちょっとくらい準備運動させろって」

苦笑しながら輝螺は自分が持ってきた刀――《螺鈿》を抜いた。

輝螺の愛刀《螺鈿》は、輝螺がこちらの世界に来たとき、一緒に持ってきていた刀である。

螺鈿の名前に恥じない鞘拵えの美しさ。しかし華美に走るのではなく、あくまでひっそりと、しかし確かな華麗さを醸し出している。

そして、何よりも異質の特徴は、切れ味が落ちず、決して折れないことである。

本来日本刀とは、切れ味は最高だが、折れやすいことや、切れ味の落ちが著しいことが  
謔ユ知られている。

輝螺が明鏡の所で作ってもらった五本の刀は、灯の、つまり鳳凰の尾羽を使い、また輝螺や灯の氣を固めた玉を火に入れて打ってもらったものである。

鳳凰がフェニックスに通じることを利用し、蘇生の神秘性を刀に持たせ、日本刀最大の欠点を克服しようと考えたのである。

灯に代表されるように、鳥から人間になれる、そんな奇跡や神秘、幻想が実在する世界。

そして輝螺の考えは見事の中。

切れ味が落ちず、さらには月蓮の南海霸王と打ち合っても折れない、剣士にとってうってつけの刀が完成した。

さらには氣を混ぜた炎を使用した為、氣のりもよく、様々な応用もでき、氣を扱うのが得意な輝螺や灯達にとって、二つとない、最適の武器となったのである。

ここで、少し時を戻して。

輝螺が調練場を出たとき、月蓮達はようやく正気を取り戻した。

「……………ねえ祭。今の、分かった？」

月蓮の問いに、祭は恐る恐る首を横に振った。

「いえ……………それどころか、全く見えんかった」

「そう……………」

そう呟くと、月蓮は明鏡と打ち合っている灯を見た。

先ほどの会話を聞く限り、体慣らしとして打ち合っているのだろう。  
どちらの刀も体に当た

驍アとはない。それどころか灯のほうは笑っている。

これを見た月蓮は息を呑んだ。

先ほどの雪蓮対明鏡の試合。

圧倒的な強さで雪蓮を破った明鏡。

さらに、その勝ち方が異常だったのである。

「じゃあ祭、さっきの明鏡の剣閃、見えたかしら？」

「いえ。そつちも同じじゃ」

そう、と返事をすると、今度は灯の剣を受けている明鏡を見る。

明鏡も灯の速い太刀筋を全て見極め、的確に処理している。

それを見ながら、月蓮は先程の戦いを思い出していた。

とは言っても、思い出せることはただ一つのみ。

しかしそれは印象に残ったことが一つであった、ということではない。

明鏡が行ったのは、ただ一度だけの居合い切り。

ただ、月蓮、祭、永琳、さらには蓮華に小蓮、それどころか周りにいる兵士達全員には、分からなかったことがあった。

明鏡がいつ刀を抜いたのか。  
どのように雪蓮を切ったのか。  
いつ刀を納めたのか。

そして、いつ、雪蓮の後ろまで駆け抜けたのか。

それが、全く分からなかったのである。

雪蓮も、江東の虎とまで言われる月蓮の娘。まだ若いものの、そこ

らの将には負けない武を持つ。月蓮も、もう少し知を身につけたら戦場に連れて行こうと思っていた。

しかし、そんな雪蓮を傷一つどころか、汗一つ垂らさず、息一つ乱さずに倒した明鏡は、どれほどの者なのか。

さらに輝螺が明鏡は軍師候補だと言っていたのを思い出すと、さらに頭がこんがらがってしまう。

そして、そんな人物と戯れるかのような様子で、軽々打ち合っている灯も決して無視することはできない。

神速といっても差し支えない剣閃を明鏡が放つても、灯は顔色一つ変えずに紙一重でかわし、即座に反撃する。先程の戦いでは汗一つ掻かなかった明鏡が、息を荒くしているのに、灯の方は汗どころか、まるで我が子の成長を喜んでいる親かのように笑みを浮かべている。

と、そこで、明鏡の訓練は輝螺と灯がつけていたと、輝螺自身から聞いたのを思い出す。

ならば灯と明鏡の差は、師と弟子の差、というわけか。

ならば、その師の灯の実力は、雪蓮どころか、祭や祭に匹敵する武将より上ではなからうか。

そして、あと一人忘れてはならない人物がいる。

それは輝螺である。

もとより『孫呉の麒麟児』『孫家始まって以来最大の才児』とまで

言われ、流石にまだ早いと言われていた初陣の折にも、永琳に負けず劣らずの策を巡らせ、被害を最小限に減らし、快勝した。

その快拳の噂は呉だけに留まらず、多くの諸侯に知れ渡ることとなったのだ。

最近では戦略戦術を巡らすことに興味があり、勉学にかけられる時間も多くなっているが、その前は祭でも手がつかない程の戦闘好きで、初陣そしてその後の戦いの功績から、誰がつけたのか、『覇龍』と呼ばれるようになった。

『覇』の字は、その戦における活躍ぶりから。

『龍』の字は、輝螺の名の『仁』の字が青龍に通じることから。

二つ名と共に広まる武勇。

それに恥じない確かな実力。

「(まさか……ここまで凄い人物をつれてくるなんて……)」

管輅

司馬徽

清鳳

「輝螺つたら、とんでもない猛将を連れてきたわね」

月蓮はそう呟くと、戻ってきた輝螺と未だ息を乱していない灯の戦いが始まるのを楽しみにするのだった。

輝螺の準備運動が終わると、二人は調練場の真ん中に立った。

「んじゃ、始めようか」

「うん。じゃあ、いち、にの、さん、で始めね」

そう言うと、灯は刀を鞘に納めた。輝螺も同じように納める。

「あれ？ 輝螺も？」

「ああ。出し惜しみ出来るような相手じゃないんでな」

「あはは！！・・・じゃあ、いくよ。いち」

今までの和やかな雰囲気は全て吹き飛び、二人は柄に手を添える。

「にの」

腰を落とし、互いに互いの目を見据え、足に力と氣を込める。

そして。

「「さんっ！！」」

・・・キイイイイイン！！！！！！！！

目にも留まらぬ速さで二人が交差し、戦いが始まった。

調練場に響く金属がぶつかり合う音。

その激しさはまさに嵐のようで。

「ヤアアアアアア！！」

「まだまだ！！ もっと来い灯！」

「言ったなー！！」

灯はさらに速度を上げ、畳みかけるように輝螺に切りかかる。

だが輝螺もそれを避け、時には受け止め、未だに一度もその刃は当たっていない。

だがそれは輝螺にとっても同じことで、灯の攻撃が速すぎて、なかなか攻撃にまわることが出来ず、今のように挑発しようとしても、表面上それに乗った

謔、に見せかけて、実のところ全く隙を見せず、結果的に激しい均衡状態となっているのだった。

「うーん、ここうなったら！」

そう言うと灯は後ろに飛んだが、すぐに輝螺が追って切りかかった。

「あーっ！ 追ってこないでよーっ！」

灯もそれを受け止め着地し、輝螺に文句を言う。輝螺はそれを聞くと刀を止め、呆れたように溜め息をつく。

「はあ……追わないでって、追わなかったら《気閃》飛ばそうとしてたろ。こんな狭いところでやるなよ」

「うう……だって負けたくないし……」

灯は悔しそうに輝螺を睨む。

「あー分かった分かった。体術とか使ってもいいから。それならいいだろ？」

「うー、しょうがないなー。ちえ、氣が使えないのは残念だけど」  
唇を尖らせながら、灯は刀を構え直す。

「この刀じゃ、やりにくいなー。輝螺、これが終わったら曲刀買いに行こ」

「はいはい。終わったらね」

溜め息をつきつつ、輝螺は灯に切りかかり、再び斬り合いが始まったのであった。

私は目を疑ってしまった。

周りにいる兵士達は興奮して沸いているが、私や祭達は絶句してしまっていた。

「母様母様！ お兄様、凄いです！」

自分の兄の剣術を見て蓮華がはしゃいでいるのを見て、少し微笑ましく思ってしまった。

だがそうほのぼのしていられるような状況ではない。

あの二人の剣がぶつかる度に、たくさん気が飛んでくる。しかも、あの二人。なぜか極力気を感じにくくさせようとしている。

だが祭や永琳は感じるようで、私と同じように息を呑んでいる。

「祭、永琳。貴女達も感じるのね」

「ええ。どうもあの二人隠そうとしてるみたいだけど」

「そうじゃのう。あの気の質、隠そうとしても分かる者には分かる。あのような凄まじい氣、ワシでもだせん」

「そう。でもどうして氣を隠すなんて面倒なことをしているのかしら？」

隠しているのにも関わらず、感じる氣はピリピリする。

これほどの闘いをする二人なら、もつと凄い氣を持っていることは疑いようもない。

ならば何故それをしない。

氣を開放すれば、動きも速くなるし、攻撃力も上がる。

それに、二人は本気でやると言っていた筈だ。なら尚更氣を全て開放して戦うはずだ。

それこそ、この二人が本気で氣を開放したら、私でも耐えきれないかもしれない………っ!?

そこまで考えて、私はあることに気がついた。

私も一介の武人。若い頃から戦場を駆け抜け、少なからず残酷な事も経験している。もちろん武も磨き、度胸もつけてきた。それは祭だってそうだし、軍師の永琳だって、戦を経験している武人だ。いや、ここにいる兵士達だって武人だろう。皆それぞれ武人としての度胸はもっている。もし強い氣に当てられても、悪くても氣絶で済むだろう。

だが、戦を経験したことの無い蓮華はどうだろうか。それどころか、まだまだ幼い小蓮はどうなるのか。

まだ戦場に出たことが、そして、生死をかけた戦いをしたことがない二人が、あんなに強力な氣を浴びてしまったら、どうなってしまうのか。ヘタをすれば、氣絶するだけではすまなくなってしまうかもしれない。

「そっか……ふふふ、やっぱり貴方はいいお兄ちゃんね」

「え？ お母様、何か言いましたか？」

蓮華がキョトンとした表情で見上げてきたので、私は可愛くなって蓮華の頭を撫でてあげた。

「貴女のお兄ちゃんはスゴい、って言ったのよ。ほら、シャオもこつちに連れてきてあげなさい」

蓮華が笑顔でシャオを呼びにいつているのを見ているとき、フと疑問が浮かんだ。

「（輝螺は兄だから分かるけど……灯は……？）」

そんな疑問がフと浮かんだが、おそらく輝螺が事前に言っておいたのだろうと思い、こつちに来る蓮華とシャオに手招きした。

《月蓮 side end》

「たあ！ とあ！ やあ！」

可愛らしいかけ声とは裏腹に、一発一発の音が殺人的で、輝螺も腕や足に氣を込めて応戦していた。

「てい！ そりゃ！ てやあー!!」

「ってか、そんな可愛いかけ声出してんなら、こんな殺人拳放つな！」

「え、ボク可愛い？ ……て、照れちゃうな、もう……」

「そこじゃねえよ！」

こんなたわいのない話をしている二人だが、戦い自体はこんな会話をしているとは思えないほど激しさを増していた。

今までの戦いも凄かったが、今は二人とも手足も使い、隙さえあれば切りかかる。もはや常人では割り込むことなど不可能の領域である。

「ちっ！ 灯、お前隠れて練習してただろ。明らかに腕が上がってるぞ」

「へっへーん。今日こそは負けないんだから!!」

一層速くなる灯の攻撃。だが輝螺はそれに物怖じせずそれどころかニヤリと笑みを浮かべた。

「むっ、ワルそーな笑い」

「うっさい。…ま、確かに速いけどな。だからこそ単調になりや

すいんだ、よつと！」

一瞬の隙をついて灯の刀を跳ね飛ばす。

「あ、ヤバっ!？」

灯も流石に気を乱してしまう。そんな決定的瞬間を輝螺が見逃すはずがなく一気に切りかかる。

「甘ーいつ!! そんな

ネんじゃ隙がありすぎだよ!」

だが灯は退くことなく輝螺に突っ込んでカウンターを決めようとする。この灯の見事な攻撃に、皆が決まったと思った。しかし輝螺はまたもニヤリと笑みを浮かべる。

「そうだな。甘いよ、灯。隙、ありすぎだ」

「え?」

輝螺は自分から刀を捨てると、伸ばしていた灯の腕を掴み、そのまま灯の勢いを生かして一気にクルリと投げ飛ばした。

見事な一本背負いである。

「あいたっ!?!」

灯は地面に背中を打ちつけた。受け身は取っているが痛いものは痛かったらしい。

「さて、降参するか？」

輝螺は空から落ちてきた灯の刀をキャッチし、それを灯の顔の横の地面に突き刺した。

「あはは……この状況を挽回出来るだけの力はボクにはないかなあ  
ー」

灯は苦笑いしながら、寝っ転がったまま両手を上げた。

「こーさんです。あーあ、やっぱり輝螺には適わないなー」

「そんなことないさ。気抜いたらすぐに追い抜かれちまうよ」

こうして輝螺対灯の試合は、輝螺の勝利で幕を閉じたのだった。

輝螺が「医務室行ってから玉座の間に行く」と言って、灯と光と明

鏡を連れて医務室へ行ってしまったので、月蓮たちは一足先に玉座の間に集まっていた。

「それにしても凄かったわねー。まさかあんなに凄いは思わなかったわ」

「そうね。みんな一騎当千って言っても過言じゃないわ」

「それに光と明鏡は軍師志望じゃろ？ あれほどの武を持ちながら、知も持ち合わせてるとは驚きじゃ」

「きつと、孫呉にとってかけがえのない将となるわね……と、来たわね」

月蓮が扉の方に顔を向けると、ちょうど輝螺達が入ってきた。

「ごめん、待たせちゃって」

「いいのよ。．．それにしても輝螺、ものすごい人材を見つけてきたわね」

「ああ。それで母さん。三人を認めてくれるか？」

「ええ。もちろんよ。三人ともよろしくね」

月蓮の言葉に、光と明鏡はホッと息を吐いた。

するとそこで輝螺が一步前に出た。

「ん？ どうしたの輝螺？」

「母さんにちょっとお願いしたいことが……」

「お願い？ 何かしら？」

「前に言った先鋭部隊、覚えてる？」

以前輝螺は、月蓮に先鋭部隊を作らせてくれと頼んでいた。来たる乱世に向けて提案し、月蓮も賛成してくれたのだが、副隊長となるような将がいなかったのである。

隊長は無論輝螺。だが若年ながら輝螺の将としての才能は花開き始めていた。そんな輝螺を支えられる武将は、それこそ他の隊の隊長をやっている。

「なるほどね。たしかに三人ほどの実力者なら、輝螺に着いていけるわね。………………。……いいわ、認めてあげる。灯、明鏡、光。貴女達三人は輝螺の副官として働きなさい。働き次第では更に上の地位を与える」

月蓮は三人に向かってそう言った。しかし灯は首を横に振った。

「ボクはずーっと輝螺の副官がいいな」

この言葉に、周りの者は驚きの表情を浮かべた。

「ん？ 灯。お前は地位などには興味はないのか？」

「うん。ボクは輝螺の傍に居られればそれでいいもん」

「そうですね。私も輝螺くんと一緒の方がいいですね」

「ああ。私も輝螺の本当の実力というのを見てみたいしな」

「ほほう！ 地位や名誉よりも、輝螺を取るのね！ 気に入ったわ！

貴女達は先鋭隊副隊長とするわ！ 輝螺もそれでいい？」

「もちろん。こいつら程の人材を探すのは骨が折れるしな」

そして灯達三人は、輝螺直属の将となり、その名を大陸全土に轟かせるのに、そう時間はかからないのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2882n/>

---

恋姫無双 声を聞く者

2010年10月9日16時10分発行